The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	合巻制作の一様相 ： 京伝と三馬における相互利用
Author(s)	有澤, 知世
Citation	語文. 2014, 103, p. 27-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70942
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

合巻制作の一様相

――京伝と三馬における相互利用――

有澤知世

はじめに

江戸戯作において、同一の素材が利用されること、また、同時期に刊行された戯作諸作品に、しばしば同様の趣向が用いられることに関しては、時代思潮や流行の点から説明されることが多い[1]。後述するように、商品である戯作には、想定された読者層に応じた工夫が施されたはずである。先行作と同様の趣向が用いられたのは、読者に対して、何らかの意味を持ち得る工夫を施し得たためではないか。

近年、文化初年に刊行された山東京伝と曲亭馬琴の読本の趣向が近似している問題について再検討が行われ、高木元氏[2]、大高洋司氏[3]によって、本屋（板元）・鶴屋喜右衛門の積極的な関与による、意図的なものであった可能性が指摘されている。

高木氏[4]が、

近世文芸の顕著な特質は出板流通機構の上に成立したことにある。（中略）〈商品〉としての書物が大量に生産され消費されるようになった十九世紀以降、その出版流通機構を無視した文学研究は成立し得ないといっても過言ではなかろう。

と言及されるように、特に文化年間以降の江戸戯作が、商業ベースの出版流通機構の上に成り立っていたことを考えると、江戸戯作の制作・享受の様相を明らかにするには、このような視点からの考察は不可欠である。本屋の存在を含め、戯作同士の関係の捉え直しを行い、作者における対読者意識の考察を含めた検討を行うべきであろう。

その検討に際して、本稿では、京伝作品と式亭三馬の合巻作品における利用関係に着目する。京伝と三馬は、ともに合巻の創始期に活動し、多くの作品を生み出した戯作者である。両者の関係については、本田康雄氏[5]が「山東京伝の作品から式亭三馬は多く学んでいる。そのことは（中略）両者の生涯にわたって多くの作品について指摘することが出来る」と述べるように、一般的に三

馬は京伝の追随者とされる。

稿者の調査の結果、三馬が京伝作品を多く利用していることは間違いないが、その一方で京伝もまた三馬の作品を利用しており、京伝と三馬は相互に、先行作を利用していることがわかった（以下、こうした作品の利用方法を「相互利用」と呼ぶ）。

このような関係に注目し、それぞれが、素材をどのように用いているのかを分析することによって、文化期における合巻の制作・享受の有様を考察したい。

一　京伝から三馬へ

（一）京伝『暁傘時雨古手屋』

先行研究における京伝から三馬への影響についての指摘は、洒落本や滑稽本に関するものが中心である。合巻に関しては、本田氏[6]、林美一氏[7]、棚橋正博氏[8]によって六例が指摘されているが、なお検討の余地が残されていると考えている。本節では、三馬が京伝『暁傘時雨古手屋』[9]（合巻、勝川春扇画、文化八年〈一八一一〉刊、蔦屋重三郎板。以下、『暁傘』）を利用している事例について検証する。

京伝は『暁傘』後編において、浄瑠璃「桜鍔恨鮫鞘」[10]（作者未詳、安永二年〈一七七三〉大坂豊竹定吉座初演。以下、「桜鍔」）「鰻谷の段」における〈書置きの代読〉の場面を利用している。「鰻谷の段」の内容は以下のとおりである。

お妻は、夫・八郎兵衛の入り用の金を用立てるために、心ならずも愛想尽かしをして夫に斬られる。無筆のお妻は、八郎兵衛に事情を知らせるために娘に口伝えで覚えさせ、お妻の死後、娘はその内容を八郎兵衛に語って聞かせる。

傍線で示した、遺された子どもが、母親の口伝した遺言を語るというくだりを、〈書置きの代読〉と称しておく。

『暁傘』後編が、「桜鍔」の世界に拠ることは、京伝自身が冒頭の「小引」で「赤まへだれに血をあやす、妻にうらみのさめざやは」（傍点、稿者）と述べていることや、「桜鍔」の人名（お妻・八郎兵衛）・地名（鰻谷）を利用していることから明らかであり、すでに清水正男氏[11]によって指摘がなされている。

『暁傘』において、次のようなくだりで〈書置きの代読〉が取り込まれている。

お妻が、夫・八郎兵衛のために、立ち入りを禁止された神木に登るが、他人に見つかり、口止めのために夫に斬られる覚悟で心ならずも愛想尽かしをする。〈神木に登る女〉

お妻は、自分の死後、事情を伝えるために書き置きを残そうとするが、無筆であるため、子どもにその内容を覚えさせる。お妻の死後、子どもがそれを八郎兵衛らに語って聞かせる。〈書置きの代読〉

このうち前半部の、女が立ち入りを禁止された神木に登るというくだりを、〈神木に登る女〉と称しておく。以下に該当場面の本文を示す。

必ず化石あるに疑ひなし（中略）a天神の森に至りて窺ひ見

るに、果して龍灯上がりければ、さてこそと嬉しみつゝ松の木によぢ上る折しも、道具屋弥兵衛、隠置きたる色紙の箱を取出さんと、これも松の木に上りけるが、（中略）b弥兵衛はお妻が片袖を引千切り、お妻は色紙の箱を抱へて逃失せたり。（中略）明くる朝になり、松の枝の折れてあるを見て、これ大いなる狼藉なり。何者の仕業やと、目代より厳しく詮議せられけり。（中略）c松の枝を折つたる罪は我が身一つに引受けて、夫に罪を着せまいといふ覚悟なれば、それと打明け言ひ難く、殊に弥兵衛が前なれば、わざと愛想づかしを言ひけるにぞ、（中略）dわしが心を八郎兵衛殿にちよつと一筆書残したく思へども、いの字も書けぬ無筆の悲しさ。（中略）此幼子の持遊びに書置の文句をなぞらへ、此子によく〳〵言ひ含め置くならば、年に似合はぬ物覚へよき子なれば、思ひ出して語るならん。（中略）「これ半太よ。母が教へた事といふはなんじや〳〵」と尋ぬれば、半太はきつと畏まり、「これ父様。書置の事〳〵」と言ひつゝ、かの持遊びを並ぶれば、八郎兵衛も音助も心付き、「さてはdお妻は手に掛かる覚悟にて、無筆ゆへ、委細の訳を半太に言ひ教へ置きしならん。どふじや〳〵」と尋ぬれば、半太は頷き、「此持遊びや何やかやが、書置の事〳〵」と言ふゆへ、そんならお妻が此様に、持遊びを括分けて渡したる此括り目は一つ書の心ならん。此順に問ふて見んと、音助もろとも並べ見て、八郎兵衛まづ初めに綿と櫛を一つに括つたはなんじや〳〵。半太ソリヤ、わたくしじや。

さて、この場面は〈書置きの代読〉に加え、〈神木に登る女〉という要素から構成されている。二箇所の傍線部dが、「桜鍔」における〈書置きの代読〉の内容と対応する。

そして、二重傍線部は、京伝が「小引」で「しん手なかきおきに、忠と孝とのはんじもの」と述べ、清水氏[12]が「判じ物の趣向」として指摘する箇所である。「桜鍔」においては、無筆のお妻が、子どもに書置きの内容を口伝して覚えさせていたが、『暁傘』では、並べた玩具で文字を表し、その「判じ物」を手がかりに、半太が書置きの内容を伝える。京伝は、この「判じ物」を用いた工夫のことを、「しん手なかきおき」と述べているのである。

また、傍線a b cで示した箇所が、梗概の〈神木に登る女〉に対応する箇所である。傍線a bは、お妻が、八郎兵衛のために立ち入りが禁止された神木に登り、意外な物を手に入れるという内容、傍線cは、お妻が神木に登った証拠を残してしまったため、家族に咎めが及ばぬよう、心ならずも愛想尽かしをするという内容である。

この場面において、京伝の工夫は二つある。まず、浄瑠璃でお馴染みの〈書置きの代読〉を、判じ物を用いて新鮮なものにしたこと、そして、「桜鍔」にはない〈神木に登る女〉の要素を加えたことで、「桜鍔」の世界に意外性を持たせていることである。京伝は、冒頭の「小引」で、作品の世界を示している。これは、あらかじめ読者に「桜鍔」のあらすじを想起させ、読みを誘導す

るためだと思われる。この「小引」による誘導により、本作の趣向を、より楽しむことができるのである。

（二）三馬『万屋玉桐とうらうの番付』

三馬『万字屋玉桐とうらうの番付』[13]（合巻、歌川国直画、文化十一年〈一八一四〉刊、鶴屋喜右衛門板。以下、『万字屋』）巻三から巻五においても、〈書置きの代読〉が用いられている。該当箇所の内容は以下のとおりである。

夫の病を救うため、玉桐は神木に登って薬をとり、切ってはならない木を折ってしまったため、家族に迷惑がかからないように自首する。その際書置きをのこすが、夫は病のため目が見えず、利発な子ども千松が書いてある文字を説明し、解読していく。

この場面が「桜鍔」における〈書置きの代読〉を踏まえていることは明らかであるが、三馬が実際に利用した素材については検証を要する。以下に該当場面の本文を示す。

筑紫明神の楠の木はⓐ大切な神木で、切ることならぬきついぬ因果な鳥目（中略）ヲヽこりや〳〵千松、ササヽヽわれ読め〳〵。アイ〳〵書置きの、コレ父様ゞ此下の字が読めぬはいのう。ドドドレ〳〵どんな字ぢや〳〵。アイ、上の方が折ッて丸う結んで跳ねてあるべムウムウそりやヲヽ〳〵事といふ字ぢやべ書置きの事（中略）ヤアそんならⓒおれが病気を助けうため大切な神木を切たか（中略）無理矢理に暇をくれいと言ふたのは親や夫や千松に難儀をかけまいためであつたか

傍線ⓐⓑⓒの内容は、『暁傘』における傍線ａｂｃの内容と、それぞれ対応する。三馬は、「桜鍔」の〈書置きの代読〉に、〈神木に登る女〉を組み合わせた『暁傘』を利用していると判断できる。

次に、『暁傘』とは異なる箇所に注目する。三馬は、〈書置きの代読〉における、女が無筆で書置きが遺せないという内容（傍線ｄ）を、『万字屋』において、男の目が見えず書置きが読めないという内容（傍線ｅ）へ改変し、子どもに書置きを代読させるに至った事情を変化させている。

この箇所は、三馬が自身の合巻『冠辞筑紫不知火』[14]（歌川豊国画、文化七年〈一八一〇〉刊、鶴屋喜右衛門板。以下、『不知火』）を再利用しているものであろう。『不知火』における該当場面の本文は、以下のとおりである。

ⓔ夫の眼病、わらはは無筆、手形の文字も読めぬ（中略）二

階の老母の声として、あつとたまぎる物音に、是はと驚き駆上れば。早や事切れし自害の体。（中略）申し父様。こゝに何やらお文がござんす。〳〵ムゝ文とは確に、ⓔ母人の御書置き、子細ぞあらん。アゝこれ生憎に目は見へず。コリヤ玉笹そなたどうぞ読んでたも。アイと言ひつゝ押開けば、書置きの事〳〵ムゝ何じや書置きの事。ヲゝよく読めるナ。

『不知火』の傍線ⓔは、夫は目が見えず、舅は無筆であるため、娘が書置きを代読するという内容である。『万字屋』の傍線eは、『不知火』のこの箇所を再利用したものであると考えられる。

そして、『万字屋』における、子どもが知らない文字を説明して書置きを解読するという内容（点線部）は、三馬が『万字屋』で、新たに施した工夫である。『不知火』では玉笹という娘が手紙を代読していたが、『万字屋』では幼い千松の健気さを強調し、涙を誘うよう工夫を施したのであろう。

以上のように、三馬は『万字屋』において、同じ「桜鍔」を素材とした、京伝『暁傘』と自作『不知火』を組み合わせ、お馴染みの〈書置きの代読〉に新しみを持たせている。そのため読者は、同様の場面であっても、他の、または同じ作者の異なる作品を見比べて、その趣向の違いを楽しむことができるのである。

二　三馬から京伝へ

第一節で確認したとおり、確かに三馬は京伝作品を利用しており、このような事例は、他にも指摘することができる。

では、両者の関係は、従来指摘されてきたように、三馬が京伝の追随者であるに過ぎなかったのだろうか。この節では、三馬作品が京伝に利用された事例について考察する。

三馬『雷太郎強悪物語（いかづちたろうこうあくものがたり）』[15]（黄表紙、歌川豊国画、文化三年〈一八〇六〉刊、西宮新六板。以下、『雷太郎』）には、次のような挿話がある。

様々な悪事を犯した雷太郎と無理太郎は、逃亡中一旦別れて身を隠すことにするが、雷太郎は、昔殺した人々の、生首の亡魂に悩まされる。合流した二人は、虎右衛門の元で匿われる。虎右衛門は、夜中に刀を振り回す二人の姿を目にする。二人は、他人には見えない亡魂に苦しめられていたのだった。

以下に、該当箇所の本文を示す。

雷太良は（中略）a先つ頃非道に殺せし宗太郎夫婦の亡魂、夜陰にいたればあらはれ出、うらめしや〳〵と前後にまとひ、さも恐ろしき顔色にて雷太良を睨み居れば、太良も物憂く思ひて、b切れども突けども霧の如くに刀をくゞりまなこをふさげば、瞳の内にあらはれてさめ〴〵と泣き、又哀れに細き声音を出して、雷太良うらめしや〳〵やがて思ひ知せんとてc毎夜〳〵苦しめけり（中略）半夜の鐘響く頃ほひ、d雷太郎無理太郎の両人顔色変つて起き上りしが、やがて刀をひらめかし、辺りをめつた打になぎまはり、きつそう変りて見えければ、虎右衛門はなはだ訝りしは、やゝありてもとの如くに打臥しけり。あまりに不思議の事なれば、夜明くるとその

ま、両人に向かひその有様を語り、様子いかにと尋ぬるに、c雷は、宗太郎夫婦の亡魂毎夜来りて、かくの如く苦しむる由を語れば、無理太郎も同じく、是まで非義非道に殺したるあまたの首ころび出、あるひは怒り、あるひは笑ひ、又はものかなしく泣き叫びて、われ〳〵汝を待つ事久し。早く来れ〳〵と口〴〵に狂ひ叫び、おそろしきこといはんかたなしとさんげしければ（中略）a「うらめしやのふ、雷太良よ雷よのふ」「むり太良はやくこい」

この挿話における、悪人が襲われる怪異のことを、〈飛び回る生首〉と称しておく。

さて、京伝『敵討（かたきうちもどりの）衞玉川（たまがわ）』（合巻、北尾重政画、文化四年〈一八〇七〉刊、蔦屋重三郎板。以下、『衞玉川』）にも同様の挿話がある。該当箇所の梗概は以下のとおりである。

小三と金五郎は、敵の黒瀧雲八を追い、旅をしている。一方雲八は様々な殺害、悪事を働きながら逃亡していた。その道中、六地蔵の頭の上に男女の生首が一つずつ載せてあるのを見つける。それらは雲八に恨みを持つ者達の亡魂であり、一晩中雲八を苦しめた。そしてその怪異は続き、偶然、雲八と同宿であった金五郎夫婦は、亡魂に苦しめられる雲八の様子を目にする。

『衞玉川』における該当場面の本文は、以下のとおりである。

黒瀧雲八は遂に盗人の頭となり、廻国の修行者に身をやつして（中略）とある野原にさしかゝりけるが、ⓐ六地蔵の頭の上に、男女の生首一ヅゝ載せありけり。雲八大胆不敵の者なれば、朧月に透かし見るに、第一の首は由利之進の頭、第二は妻の根笹が頭、（中略）怒れる眼をくわつと見開き、口を開きて睨む体、恐ろしなども愚かなり。雲八行かんとせしが、身内痺れて歩まれず。（中略）ⓑ刀を抜いて斬払ひ〳〵しければ、首はいち〳〵、から〳〵と笑ひて消失せぬ。（中略）雲八その夜、野宿したるに、ⓒ又六人の首現れて、食らひ付かん勢ひなれば、刀を抜いて斬払ひ〳〵、夜の明くるまで争ひ、さすがの雲八も気力大きに弱りけり。（中略）ⓓ金五郎・小三はその夜、老人の家に一宿しけるに、夜更けに至りて一間の内に叫ぶ声あり。「又来りしか、執念深き奴ばらかな。早く立去れ〳〵」と言ふ声聞こへければ、金五郎夫婦目を覚まし、何事にやと窓より差覗き見れば、廻国の修行者、臥居て寝言に然はいふ也。暫く窺ひゐけるに、怪しいかな、由利之進が声として、ⓐ「汝黒瀧雲八め、我を種子島にて騙討にしたる故、我焦熱の猛火地獄に堕ちて浮かむことならず。汝も共に奈落の底に連行かん。早く来れ〳〵」と言ふ。（中略）ⓓ鞠のやうなる心火六つ飛巡り、姿形は見へざりけり。修行者は、その度々にうなされ、「立去れ〳〵」と叫びけり。

両話は、逃亡中の悪人が、過去に殺してきた被害者達の亡魂に遭遇し、恨みごとを言われ、冥途へ誘われる点（傍線aⓐ）、刀が通用しない点（傍線bⓑ）、毎晩苦しめられる点（傍線cⓒ）、宿泊先でも〈飛び回る生首〉の怪異に遭うが、それを目撃した人には亡魂は見えない点（傍線dⓓ）が、それぞれ対応している。

また、これらの要素のみならず、両話の挿絵にも共通点がみられる。図1は『雷太郎』、図2は『衞玉川』の挿絵であるが、悪人が寝ているところへ、八方から生首の亡霊が襲いかかり、悪人の苦しむ様子を、第三者が覗いている、という絵組が近似している。

同様のプロットの中で描かれる〈飛び回る生首〉の描写が対応し、さらに、〈飛び回る生首〉の場面を描いた挿絵の絵組が近似していることから、『衞玉川』は、『雷太郎』を利用していると判断できる。

【図1『雷太郎』】

【図2『衞玉川』】

先述の先行研究において、確認した限りでは、三馬から京伝への趣向の影響に関する指摘はないが、『雷太郎』は、『式亭雑記』[16]で「大に世に行はれて幸を得たり」と述べられる作品であり、この記述が三馬自身によることを差し引いても、京伝が話題作の『雷太郎』に注目した可能性は、十分に考えられるのである。京伝と三馬の関係は、師弟関係のような一方的なものではなく、互いに趣向を利用し合う、相互的な側面もあったといえる。

さらに、両者は互いの作品の趣向を利用し合う、密接な関係であった。この事例については、次の節で詳しく述べる。

三　京伝と三馬における相互利用

（一）京伝から三馬へ

ここまで、京伝と三馬は互いの作品を強く意識し合っていたということを述べてきた。近刊の戯作間における利用関係が密であり、あるモチーフや場面が複数の作品で用いられる場合、新たな工夫が施されることが多いと考えられるため、それら同様のモチーフや場面の一部は、変容し続けているのではないか。この節では、京伝と三馬が互いの作品の趣向を利用しつつ、さらに新たな工夫を加えている例について詳しく見ていく。

三馬『蟒蛇於長嫐草紙（うわばみおちょうわなりそうし）』[17]（合巻、歌川国貞画、文化五年〈一八〇六〉刊、浜松屋幸助板。以下、『嫐草紙』）巻之五、六には、〈殺した女の怨念によって、腹に人面疔が生じる〉という挿話が

ある。その内容は以下のとおりである。

お袖は夫の妾であるお長に折檻され、お長と夫を恨みながら自害する。その後お長の腹の中から口真似をする声が聞こえるようになる。また、腹に「人面腫」が腫れ出て、昼夜問わず痛みで苦しみ正気を失った。更に、腹の人面腫の口が「お袖がうらみおぼえたるか〳〵」と、大声でお長の罪を責めた。やがてお長は正気に戻るが、人面疔はそのままであった。

該当箇所の本文を以下に示す。

aお袖が執念のわざにやありけん、いつの程よりかお長が腹の内にて鸚鵡の如く口真似しけり。皆々驚き慌てゝ、b薬よ医者よと手を尽くせどもしるしなく、せん方尽きて見へけるが、ある老医のいふやう、昔唐土永州の人に楊勔といふ者、応声虫といへる虫の病をうれひしが、ものいふほどの事を腹中の虫口真似しければ、（中略）藍の絞り汁と雷丸を煎じ服しければ、程なく平癒せしけるとなん。かゝるあやしき病のあればこれもその趣にならはんとて、同じく薬の名を呼びけるが、こと〴〵く口真似してこれぞおそるゝ薬とおぼしきもなくあぐみはててゐけるが、日を経るにしたがひて人面疔の如く腹の上に目口鼻のやうなるもの腫れいできて、その痛みたへがたく夜昼うめき苦しみぬ。（中略）aかの蟒蛇お長が病はこれすなはちお袖が執念によりて苦しまする所なり（中略）蟒蛇お長は、応声虫のごとく又人面腫に等しき難病を得て夜昼となく苦しみけるが、火の車ももてあましてせん方なくぞ見えにける。しかるに月日を経るに従ひ、cいよ〳〵腫れ上がりて腹の目口鼻とおぼしき腫れ物より膿汁出てその臭きこと鼻をうがち何にたとふるかたなし。しかのみならず、此程よりd腹の口にて大声をふるひあげ、へ蟒蛇お長いかにや〳〵お袖がうらみおぼえたるか〳〵と昼夜暇なく喚きし（中略）e日を経てやうやく正気となり（中略）その時お長が腹の腫物大声にて言ふやう、いかにやお長我がうらみを覚えたるか、汝をうらまんため此如く難病に苦しめたり

文芸作品にあらわれる人面疔については、花咲一男氏[18]の著書や、湯浅佳子氏[19]の論考に詳しい。湯浅氏によると、俗説や文芸作品に描かれる「人面瘡の怪異譚」には①肘、膝、股に生じる②傷口から飲食する③貝母を特効薬とする④何らかの報いによる（特に女人の怨霊の祟りが多い）⑤傷口から言葉を発して恨みを述べたり、祟る人物の罪を告発したりする、といった特徴がみられる。そして、『嫐草紙』の人面疔の描写も、これらの特徴とほぼ対応するものである。

また、本田氏[20]が、

お長の腹の上に「人面瘍」が出来、目、口、鼻の如きもの腫れ上がり「おそでがうらみおぼえたか」という声がするというところ（二四ウ・二五オ以下）は「伽婢子」（寛文九年、浅井了意）巻九の四『人面瘡』、「新著聞集」（寛延二年）『腹中に蛇を生じ言をいひて物を食ふ』とほゞ同様の話しである。

と指摘するように、三馬は、先行作品に倣い、人面疔の描写を

行っているようである。さらに、人面疔譚は読本や合巻に引き継がれ、しばしば敵討譚と絡めて作品全体へ大きく関わる趣向となることが、湯浅氏の同論考で指摘されており、『嫩草紙』も、人面疔を扱う戯作の流れをひいているといえる。

ところが、先に挙げた人面疔怪異譚の特徴によると、人面疔の生じる場所は、肘、膝、股が一般的であり、稿者が調べた限りにおいては、腹に出来た人面疔は見当たらなかった。〈腹の人面疔〉は三馬の創作ということになるが、この発想は、どこから来ているのであろうか。

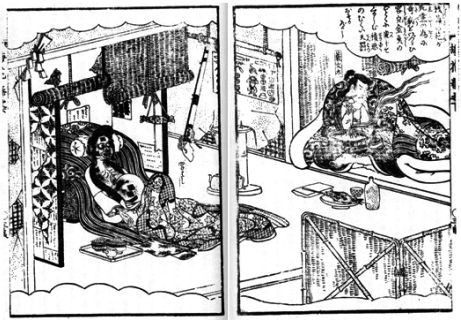
結論を先に述べると、三馬は、京伝の読本を利用して、この場面を執筆したと思われる。

京伝『梅之与四兵衛物語　梅花氷裂』（読本、歌川豊国画、文化四年〈一八〇七〉刊、鶴屋喜右衛門・鶴屋金助板。以下、『梅花氷裂』）下冊第九齣には、〈女の恨みによって腹が膨れ、奇疾ができる〉という挿話があり、『嫩草紙』における〈腹の人面疔〉の挿話と、プロットや描写が酷似している。『梅花氷裂』における該当場面の梗概は、以下のとおりである。

本妻・桟が、妾・藻の花の懐妊に嫉妬し、藻の花をその懐胎の子ごと折檻して殺す。その後桟は奇病にかかる。腹が大きく張り出して、皮膚のただれに苦しみ、「金魚の為体」となり、医者も治せなかった。また正気を失い、藻の花が乗り移ったかのように、殺された恨みを口走った。その後桟は回復したが、醜くなった面体と大きく張り出した腹は元へは戻らなかった。

京伝は、桟の苦しみを次のように描く。

ⓒ総身に毒気を発し、斑駁の奇瘡となり、ついに病の床につきぬ。これより日〳〵夜〳〵に苦痛まし、皮肉たゞれ、鮮血ながれて濃紅に変じ、膿水のたゝ事、垂氷のごとく、痒さにしのびず。（中略）ⓐ正是藻の花が怨魂の所為としられたり。腹大くはり出て、（中略）懐胎の藻の花を餓死せしめんとしたる報なるべし。殊更、顔身うち紅に変じ、面異相となり、水を好てのむたぐひ、皆是金魚の為体也。（中略）ⓑ医者のいはく、「そも面赤、項腫を蝦蟇瘟の病といひ、腹のたかくさし出るを脹満の病といひ、食類をきらふを不食病といへども、これはそのたぐひにあらず。夏子益が奇疾方にもいまだのせず。土佐某が奇病の図にもいまだ見ざる所の怪疾なり。療治をほどこすに術なし」といひて、薬を与へざれば、せんすべなく（中略）病人は苦痛しだいに一倍して、「あなくるしや、たへがたや」とおめきさけび、七転八倒して身をもだへてぞくるしみける。又はⓓ時〳〵心くるはしくなりて、（中略）蓑文太をはたとにらみ、「汝奸計をほどこして、我を無実の罪におとし、此淫婦にむち打しめ、足にかけて蹋殺し、出生の子までを殺さしめたる恨み、いづれの世にか忘るべき。見よ〳〵汝にもやがて憂目を見せんず」と詈てにらむ（中略）春にいたりてⓔ全快し、常のごとく健になりぬれども、面体の変じたると、腹のはり出たるはなほらず。



【図3『梅花氷裂』】

【図4『嫩草紙』】

両話における、アルファベットを付した傍線部の内容が、それぞれ対応する。傍線ａⓐは、奇病の原因が、折檻して殺した女（『嫩草紙』お袖／『梅花氷裂』藻の花）の恨みであるという内容、傍線ｂⓑは、医者が様々な診断をするが治せないという内容、傍線ｃⓒは、腹が膨れて奇疾が現れ膿に苦しむという内容、傍線ｄⓓは、身の内から罪を告発する声が聞こえるという内容、傍線ｅⓔは、病は回復するが腹の奇疾は残るという内容である。

さらに、両作品における挿絵の絵組が一致している（図3『梅花氷裂』、図4『嫩草紙』）。両図とも、画面左に、布団に寄りかかる、腹の大きく張り出した女（『梅花氷裂』桟／『嫩草紙』お長）が描かれており、画面右手には、その女の配偶者である男が描かれている。

なお、図3は、力綱に見立てられた紐が桟の上に描かれるなど、一般的な出産風景が踏まえられており、「腹大くはり出」た姿は、彼女が折檻で殺した、懐胎中であった藻の花を連想させるが、その妊婦の姿を、藻の花の怨念によって奇疾に苦しむ桟の姿に重ねたところに、京伝の創意が見られるのである。

以上のように、本文の記述内容の対応に加え、絵組にも明らかな一致が見られるため、三馬は『嫩草紙』において、京伝『梅花氷裂』を利用していると判断できる。なお、三馬が『阿古義物語』（読本、歌川豊国・歌川国貞画、文化七年〈一八一〇〉刊、鶴屋喜右衛門・鶴屋金助板）で『梅花氷裂』を利用していることが、後藤丹治氏[21]によって指摘されており、三馬は『梅花氷裂』の複数箇所を、異なる作品において利用していることがわかる。

さて、『梅花氷裂』における該当場面の眼目は、桟が、藻の花を殺した報いで、「金魚の為体」（二重傍線部）になることである。「金魚」は、本作の上冊における重要なモチーフである。たとえば、桟と藻の花の確執の発端や、藻の花殺害の場面に重要な小道具として登場し、藻の花の怨霊がついて異形となった金魚は、長泉寺の池に放たれ、後世でも乱中の金魚を長泉種と呼ぶ、という挿話で巻之上冊が締めくくられるごとくである。桟が、藻の花を殺した報いとして「金魚の為体」となることも、金魚づくしの趣

向のひとつであろう。

さて、『嫐草紙』における、記述の内容と挿絵に、『梅花氷裂』の利用の跡が見られることは、確認したとおりである。ただし、『梅花氷裂』の怪異譚は、〈女の恨みによって腹が膨れ、奇疾ができる〉というものであり、人面疔ではない。『嫐草紙』では、波線部・四角囲みで示したように、明らかに「人面疔」として描いており、これは三馬の創作である。三馬は、『梅花氷裂』の挿絵から着想を得ていると考えられる。

『梅花氷裂』の桟の腹には、本文の「総身に毒気を発し、斑駁の奇瘡となり」と対応する斑点が描かれ、三枚の膏薬が貼られている（図3‐B）。恐らく三馬は、桟の膨れた腹に描かれた斑点と膏薬を、目、鼻、口に見立てて、該当の場面を、〈腹の人面疔〉として描き替えたのであろう（図4‐B）。

また、『梅花氷裂』における、傍線ⓐの、殺した女の怨念によって生じた奇疾であるという記述や、傍線ⓓの、自ら罪を告発してしまうという記述が、従来の人面疔の怪異譚の特徴に当てはまることも、〈腹の奇疾〉から〈人面疔〉の着想に至った、ひとつの手がかりとなったかもしれない。

【図3‐B】

【図4‐B】

『嫐草紙』ではさらに、奇病に苦しむお長の「腹の口」から蛇が飛び出て、夫を苦しめるという怪異が起こる。この部分は、京伝『敵討狼河原』（黄表紙、歌川豊国画、文化三年〈一八〇六〉刊、蔦屋重三郎板）後編下巻における〈悪人の膝にできた人面疔の口から蛇が吐き出される〉趣向を利用したのであろう。また、先行研究において指摘はされていないが、『嫐草紙』の傍線bは、『智恵鑑』巻第十「腹中の虫口まねをする事」と、文章がほぼ一致している。

この事例では、三馬が、『梅花氷裂』の〈女の恨みによって腹が膨れ、奇疾ができる〉という趣向を、〈腹の人面疔〉の趣向へと変容させていることが興味深い。三馬は『梅花氷裂』の挿絵から着想を得、〈腹の人面疔〉を創り出した。そして従来の人面疔の話型を踏まえつつ、『敵討狼河原』における〈蛇を吐く人面疔〉の趣向を組み合わせて、独自の〈人面疔〉譚を創り出している。

戯作が、よく知られた先行作品等を利用して制作されるものであるため、戯作者は独自の工夫を施し、新たな趣向を施さねばならない。三馬による〈腹の人面疔〉の創作は、まさに、戯作者の面目躍如といったところではないだろうか。

（二）三馬からさらに京伝へ

さて、三馬は、京伝『梅花氷裂』から着想を得て、〈腹の人面

【図5『竹取談』】

疔〉の趣向を創り出した。そしてその趣向を、京伝が、さらに利用している事例がある。京伝作の『松梅竹取談』（合巻、歌川国貞画、文化六年〈一八〇九〉刊、西村与八板。以下、『竹取談』）前編巻之四において、女の恨みによって、腹に人面疔を発したという乞食坊主が登場するが、これは、先に見た『嫐草紙』の〈女の恨みによって腹に人面疔ができる〉という趣向を応用している。該当する場面の本文は、以下のとおりである。

一人の乞食坊主、腹に恐ろしき人面疔を発したるが、「女の執念にて、かゝる悪瘡を発しぬ。それゆへ、一念発起して頭を剃り、かく諸人に恥を晒して罪を滅すなり」とその因果物語をして念仏唱へ、鉦打鳴らして銭を貰ふ。（中略）「お立合いの旦那方、これ御覧じろ。此人面疔、きよろ〳〵と目を動かして人を見ます。物を食はんとする時はしきりに痛みます。焼飯、水菓子類を食はすれば、むしや〳〵と食ひ、痛みが去ります。今に物を食はせて見せましやう」

『梅花氷裂』とは異なり、文中に「人面疔」の語が用いられ（四角囲み）、二箇所の傍線部で示したように、従来の人面疔譚[22]を踏まえた内容が記述されている。またその挿絵（図5）で描かれた男の腹は、大きく膨れており、そこには人面疔が描かれている。

しかし京伝は、人面疔を、悪人の受ける恐ろしい報いとして描く先行作品には倣わない。まず、人面疔を滑稽味のある顔に仕立てている。特に、笑っている大きな口や、少し飛出たような大きな目は、点線部の記述と相まって、不気味な人面疔に愛嬌をもたせている。図4で「難病」として描かれる人面疔とは明らかに異なる描写である。

しかもこの乞食坊主は、実は神変不思議の妖術を行う怪玄という修験者であり、印相を結び呪文を唱えると、人面疔は剥落して少しの傷も残らない。この人面疔は、怪玄が人々から金品を欺し取るために妖術で出したものであった。

先述したように、怪玄は「女の執念にて、かゝる悪瘡を発しぬ」などと、先行作品にみられる〈人面疔〉の特徴を踏まえて人々に因果物語を語る。そのため読者は、悪人の所業に対する恐ろしい因果応報としての〈人面疔〉を想起したであろう。しかし次に示すように、腹の人面疔は、怪玄の呪文によって跡形もなく消え去ってしまう。

人面疔の故を問へば、怪玄打笑ひ、これも我が妖術にて、諸人を欺き銭を貪らんためなりとて、印相を結び呪文を唱へけ

れば、人面疔おのづから乾落ちて少しの傷もなし。

そして彼の正体が明らかになると、人面疔の凄惨なイメージではなく、怪玄の妖術の不思議さ、強力さが読者を引きつけることになる。本来人面疔によって報いを受けるべき悪人の身でありながら因果を人に説き、人面疔を利用して金品を騙し取るという皮肉は、したたかな悪人としての怪玄像を描くために効果的に働いているのである。

京伝『梅花氷裂』における〈腹の奇疾〉を、三馬が『嫐草紙』で〈腹の人面疔〉とし、さらに、それを承けた京伝が『竹取談』で〈腹の人面疔〉を利用している。二人は、作品の相互利用により、〈腹の奇疾〉の怪異譚を、次々と変容させているのである。

『梅花氷裂』・『嫐草紙』・『竹取談』はそれぞれ一年おきに刊行されており、作者にも読者にも、記憶に新しい作品であったといえる。この事例では、『嫐草紙』とは違う方法で〈腹の人面疔〉を描いている。京伝は、三馬が創り出した〈腹の人面疔〉を用いつつ、〈幻術による人面疔〉という新たな趣向で、従来の人面疔譚のイメージを転換させている。近刊の作品において、同様の趣向が多く扱われているからこそ効果的な方法であるといえよう。

それでは、この背景にはどのような事情があったのであろうか。

四　京伝・三馬・鶴喜

本稿の冒頭でも述べたが、文化初年における、京伝・馬琴の読本に相似がみられる問題に関して、本屋・鶴屋喜右衛門（鶴喜）の果たした役割が注目され、近年の研究によって、彼らの関係は見直されつつある。

確かに、鶴喜の企画力は注目に値する。たとえば京伝は、自身の読本作品の合巻化を行っているが、それらは全て鶴喜板なのである。具体的には、『復讐奇談安積沼』（享和三年〈一七一八〉刊。以下、『安積沼』）を『こはだ小平次安積沼後日仇討』（文化四年〈一八〇七〉刊。以下、『安積沼後日仇討』）へ、『善知安方忠義伝』（文化三年〈一八〇六〉刊）を『親敵うとふ之俤』（文化七年〈一八一〇〉刊）へ、『桜姫全伝曙草紙』（文化二年〈一八〇五〉刊）を『桜ひめ筆の再咲』（文化八年〈一八一一〉刊）へと、読本の合巻化を行っている。これらは、清水氏[23]が指摘するように、好評作に乗じた鶴喜の企画話であったと考えられる。

また、これらの作品のうち、『桜姫全伝曙草紙』・『善知安方忠義伝』は、それぞれ上方で演劇化されている。[24]大屋多詠子氏[25]は、これら読本の合巻化作品や続編が、演劇において新たに行われた趣向を利用していることを指摘する。

さらに大屋氏は、合巻に読本の広告が掲載されていることを指摘し、これらの理由として「読本・合巻の読者層は浄瑠璃の観客層とも重なっている」ことを述べる。合巻において、評判の高かった歌舞伎の演目が当て込まれることや、挿絵に描かれる登場人物に、役者の似絵が用いられることは、しばしば指摘されるとおりであり、このようなことも、戯作と演劇の享受層が重なっているからこそ行われたのであろう。

鶴喜の「企画」は、演劇の享受層を含めた読者層のさらなる拡大と、「好評作」を利用した販売部数の増加を狙ってのものであろう。しかも、『曙草紙』と『善知安方忠義伝』の演劇化が行われたのは、上方においてであった。上方の読者拡大をも、期待してのことであったかもしれない。

ところで、三馬も、京伝の読本『安積沼』の前日譚である合巻『鱸頓兵衛幻草紙』[26]（文化九年〈一八一二〉刊。以下、『幻草紙』）を執筆している。本田氏[27]は、そのねらいについて、『安積沼』の「評判に便乗したのだ」と述べる。

しかし、三馬が京伝に「便乗した」のかどうか、検討の余地が残る。ここで興味深いのが、両書とも鶴喜から刊行されていることである。前述したとおり、鶴喜は京伝読本の合巻化を行った本屋である。三馬による京伝作品の前日譚刊行も、京伝好評作をシリーズ化する、鶴喜の企画の一環とは考えられないだろうか。

三馬は、作品末尾で「卜申すが小幡小平次の前座にて鱸頓兵衛が一代話にござりまする（中略）詳しくは此板元にて梓行いたしたる読本先年御評判の高い安積沼を御読み下されませう」と述べており、このような文言は、『幻草紙』の読者が、京伝『安積沼』の読者にもなることを期待した宣伝文句である。合巻『幻草紙』を新たに刊行することによって、京伝『安積沼』は勿論、その後日譚として書かれた合巻『安積沼後日仇討』が再注目を浴びる相乗効果を期待したのであろう。

鶴喜による、読本の合巻化の企画や、三馬によって、京伝の読本『安積沼』の前日譚である『幻草紙』が執筆されたことを考えると、大高氏の指摘する、京伝・馬琴・鶴喜の「企画会議」と同様のことが、京伝・三馬・鶴喜においても行われており、彼らもまた、作品の趣向を相談し合う関係にあったのではないか。すべてが本屋主導の「企画」であったとはいえないが、戯作者や本屋が、近刊の作品や、読者の人気を強く意識しており、時には同様の趣向を用いる関係にあったことには注意を払うべきである。

おわりに

本稿では三馬による京伝作品利用の例に加え、京伝による三馬作品利用の例、さらに、京伝と三馬における相互利用の例を新たに指摘した。両者は互いの作品を強く意識し合っており、趣向を利用し合うような、相互的な一面ももっていたといえよう。

では、なぜこれほど密に先行作品の利用が行われていたのであろうか。

まず、戯作者が作品を量産せねばならず、短期間で多くの趣向を考える必要があったことが、理由として挙げられる。山東京山は、『先読三国小女郎』[28]（合巻、文化八年〈一八一一〉刊）の「自序」で、「今の赤本の如は。板元多くして作者弗庭なれば。予が如きのへぼ作者も。一年の著述十余部にいたれり。多く作る時は種自尽」と、謙辞とはいえ、過酷な制作環境を吐露している。

さらに、ある程度共通の知識を持った読者を想定し、他の作品と同じ素材をいかに扱うかで作者の力量を示そうとしていたこと

が、理由として考えられる。第四節で述べたとおり、戯作の読者や演劇の観客がある程度重なり、「好評作」のシリーズ化や演劇化もあって、作品の享受層はひろがったと考えられる。そのため、読者にとって馴染み深い演劇の世界や、怪異譚を用いつつ、新たな工夫を加えることで、江戸の一部の読者に限定されることのない、より広範囲な「読者」を楽しませることが可能であったのである。

また、戯作において、近刊の作品がしばしば利用される理由も、そこに求められよう。先述のとおり、近刊の合巻や読本の享受層は重なる部分があった。そういった「読者」は、同様の素材を用いた複数の作品を通して、ある程度、話の展開が予測できたと推察される。作者はそれを見越し、他の近刊作品を意識的に用いることで、読者の予想を裏切る新たな工夫を施すことができるのである。

京伝と三馬は、互いの作品を強く意識し合っており、近刊の作品を巧みに利用し、新たな工夫を施している。また時には、両者間で本屋が積極的な働きをなすこともあった。このように、絵師を含め、作者同士が、お互いに趣向の相談を行うことにより、同様の素材や絵組を用いながら、他の作品とは異なる、新たな工夫を施し続けることが可能になるのである。

ただ、本稿で扱った京伝と三馬の作品は、全てが鶴喜板というわけではない。彼らの密接な関係は、鶴喜の存在の上に成り立っていたのではなく、当時の戯作の制作が、このような関係を背景に行われていたと考えるべきであろう。

江戸戯作において類似の趣向が用いられた理由は、戯作・演劇といった密接する様々なジャンルの文芸により、より広くなった読者層を的確に把握した作者が、近刊の作品を強く意識し、貪欲に工夫を行ったためである。このような現象を、より積極的に「相互利用」として捉えることで、江戸戯作の本質に迫ることができると考えている。

注

（1）たとえば、京伝作の合巻『糸車九尾狐』の解題（棚橋正博執筆担当、『山東京傳全集』第六巻）では、本作の着想について「当代における九尾の狐譚の流行に与かるところが大であった」とし、同題材を扱った、同時代の読本・合巻・演劇を挙げている。

（2）高木元「江戸読本の形成―板元鶴屋喜右衛門の演出―」（『江戸読本の研究―十九世紀小説様式攷―』ぺりかん社、一九九五年）

（3）大高洋司『京伝と馬琴』（翰林書房、二〇一〇年）

（4）高木元「江戸読本の新刊予告と〈作者〉―テキストフォーマット論覚書―」（『日本文学』43、一九九四年十月）

（5）本田康雄「京伝から三馬へ―描写法の展開―」（水野稔編『近世文学論叢』明治書院、一九九二年）一五六頁

（6）本田康雄『式亭三馬の文芸』（笠間書院、一九七三年）一六四頁、三二三頁、三四七頁、三四九頁

（7）林美一「解題」（『江戸戯作文庫「作者胎内十月圖」「腹之内戯作種本」「的中地本問屋」』河出書房新社、一九八七年三月）一〇四頁

（8）棚橋正博『式亭三馬　江戸の戯作者』（ぺりかん社、一九九四

年十一月）一七五頁

（9）引用する京伝作品の本文・挿絵は、すべて『山東京傳全集』（ぺりかん社）による。なお、傍線は稿者による。以下同。

（10）内藤加我編『義太夫百段集』（金桜堂、一八九四年）所収。

（11）清水正男「解題」『山東京傳全集』第九巻（ぺりかん社、二〇〇六年）

（12）注（11）に同。

（13）『国立国会図書館所蔵合巻式亭三馬集ＤＶＤ復刻版』（フジミ書房、二〇〇八年）第三巻所収。

（14）東北大学付属図書館所蔵狩野文庫マイクロフィルム（狩野文庫№4-125591-1）

（15）早稲田大学古典籍総合データベース（請求番号　へ13　01992）画像引用も同。

（16）『続燕石十種』（国書刊行会、一九〇九年）所収。

（17）注（13）に同。第一巻所収。画像引用も同。

（18）花咲一男『人面疔伝奇』（太平書屋、一九八八年）

（19）湯浅佳子「人面瘡考―江戸時代の文芸作品を中心に―」（『東京学芸大学紀要　第2部門　人文科学』第53集、二〇〇二年二月）

（20）注（6）同書。一四五頁

（21）後藤丹治「読本三種考証―桜姫全伝・月氷奇縁・阿古義物語―」（『国語国文』8巻4号、一九三八年四月）

（22）注（20）論考で示された特徴。

（23）清水正男「解題」『山東京傳全集』第六巻（ぺりかん社、一九九五年）

（24）『桜姫操大全』（佐藤太・梅枝軒作、文化四年九月十日大坂初演）、『玉黒髪七人化粧』（佐藤太・吉田新吾作、文化五年三月二日大坂初演）

（25）大屋多詠子「京伝・馬琴による読本演劇化作品の再利用」（『国語と国文学』83、二〇〇六年五月）

（26）注（13）に同。第二巻所収。

（27）注（6）同書。三二三頁

（28）注（15）に同。（請求番号　へ13　01992）

〔付記〕本稿は、平成二十四年日本近世文学会秋季大会の口頭発表に基づいています。徳田武先生、板坂則子先生、佐藤悟先生、佐藤至子先生をはじめ、発表の席上やその前後にご教示を賜った先生方に深くお礼を申し上げます。また、画像の掲載をお許しくださった各所蔵機関に、深く感謝致します。

（ありさわ・ともよ　本学大学院博士後期課程）